

Title	E・F・ヘックシャー 産業革命以前における瑞典の人口傾向
Sub Title	
Author	新保, 博
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.1 (1952. 1) ,p.71- 72
JaLC DOI	10.14991/001.19520101-0071
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520101-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のための單なる手段であるとは思へなくなつて來た。彼等は土地を政治權力の主要な基礎とも又生活資料の重大な給源とも見ず、既にこの時期には土地を經濟利益の貴重な源泉と看做すまでになつてゐた。そして土地に對する新しいかかる態度が彼等を驅つて農村に向はせたこの第十五世紀には、未開地への進出が殊に目覺しく、或る意味で第十五世紀の伊太利には西漸運動の華々しかつた第十九世紀の亞米利加にも對比するべきものがあつた。

(渡邊 國廣)

E・E・リッチ

『エリザベス朝イングランドの人口』

(E. E. Rich, "The Population of Elizabethan England" Economic History Review, No. 3, 1950, pp. 247-265.)

一八〇一年以前には官廳統計もない。嘗て人口数の推定は専ら洗禮や埋葬の臺帳の調査に據つて來たが、到底これ等から正確な數字は得られる筈がない。然し本稿での當面の課題は、エリザベス時代のイングランド人口の算定ではなく、寧ろこの期における住民の國內移住についてである。

今日傳はる徵兵簿には一五五八年の最初のそのほかに、このエリザベス時代については、一五五九年・六〇年・六九年・

七〇年・七三年・七七年・八〇年・八三年・八七年及び八八年がある。これ等いつれにあつても郡における十六歳から六十歳までの男子のうち戰鬥に耐え得る者が調査され、そして該當者の數・本名・副名・郡・教區及び住所が、時には彼の特技・身分・資力までが戸主の責任において報告されてゐる。登録の不正は無論あつた。調査表は州の徵兵官が集計して中央に報告するのであるが、この間に計算の誤謬は避け得べからざるものであつた。然し徵兵簿が當時における特定男子の實數の大體を傳へてゐるといつて差支へない。尤もこの點は徵兵簿作成の目的でもあつたわけである。

徵兵簿の語る他の事實は社會經濟史的には一層重要である。サセックスの隣接する二郡の報告では一五六九年と僅か四年後の七三年とでは五二二の差が出てゐる。ハムプシャーでは海岸部の報告が一五七四年から七七年の間に約五割の増加を示してゐるのに對し、内陸部では逆に五割の減少である。又ケムブリッジの諸郡のうちには一五六九年から七七年の間に二倍に増加したのがあつた。ケントではサトントン地區の北部の八郡が一五七三年から七七年の間に一八三六から一八八九といふ僅かな上昇しか示さないのに對し同じ地區でも南部の四郡では七三年の七四八から六割の増加を遂げて七七年は一八九一に達してゐる。又同じ頃ミルトン地區は六九六から八〇一の増加、他方隣接のワイ地區では四八九から三五五、チャート地區

では五〇〇から三〇〇の減少であつた。

隣接する二つの郡の報告においてこのやうな短期間のうちに起つた極端な増減の關係は、人口に顯著な變化を與へる重大な原因の全く見當らない當時にあつては、國內移住以外に適當な説明の手段が求められない。小さな村において徵兵簿に記載された人名の半ば以上が一五七七年から八三年の短かい間に交替してゐたといふ事實も亦エリザベス時代の國內移住を十分に裏書してゐる。全般の事情から推して大抵の人がこの時期には二代に少なくとも一度は移住してゐたといつてよい。そしてかかる國內移住の經驗が後の北米植民に際し大きな力となつた。寧ろそれは普通喧しくいはれてゐる宗教的要素以上ですらあつたのである。

(渡邊 國廣)

E・F・ヘックシャー

『産業革命以前における瑞典の人口傾向』

(E. F. Heckscher, "Swedish Population Trends before the Industrial Revolution," The Economic History Review 2nd Series, Vol. 2, No. 3.)

瑞典の組織的な人口統計は一七四九年に始まり、それは最初から驚くべき程完全であつた。だが完全性と確實性とに於てこの一七四九年に始まる統計とは比較しえぬといへ、最も古い

統計はそれより約三十年も遡る。本稿の課題は、主にこの人口統計に基き、出來れば他國の統計と比較しつつ、瑞典の人口傾向を研究する事にある。

チャールズ十二世の二十年間の戦争が終つた一七二一年の總人口は一、四四〇、七〇〇人で、それ以後十五年間は死亡率非常に低く、十九世紀中葉迄かかる低さは見られない。この主要な原因は長期の戦争の終結にある。即ち戦争が一種の淨化として作用し老人や弱者を除去した爲、戦争終結直後の方がその後平時よりも條件が有利であつた。一七三六年頃より死亡率は急に上昇し、一七四三年に最高點に達し一〇〇〇人に對して一三・六人の死亡超過を示した。これは戦争以外の原因即ち穀物の不作の結果である。低死亡率が過剰人口を創出するという意味に於て、この高死亡率は前十五年間の低死亡率に對する反動である。併し一七四五年には四三と同率の出生超過を示した。一七七一―二二年の二度の凶作の結果、一七七三年には死亡率が空前の高さを示し、總人口の五・二五%が死亡した。其翌年から豐作の結果死亡率は低落し、人口増加は殆んど例外的な高さを示した。次いで一七八〇年代の一連の不作は死亡率の増大を齎らし、一七八八―九九年には對露戦争の結果として、死亡超過が生じた。だがそれに直ぐ續いて低死亡率、人口の急増加が見られた。

變動する要因は第一に死亡率であるが、これは收穫に強く影

響を受ける。大體に於て死亡率と收穫とは平行している。死亡率の最大の變動中の或ものは戦争に關聯しているが、これには戦争と關聯して他の原因即ち飢餓と疫病が作用して居り、然も此等は必ずしも戦争から生じたものではない。一七二〇—一八一五年の九十五年間に死亡超過の年は十一であつて、この間に總人口は七〇%増加した。かくて瑞典では産業革命以前に於ける生産上の進歩は、生活水準の向上でなく人口増大なる形で現はれた。生活水準は絶間なき戦争の時代であつた。十七世紀に比すれば或種の改良が行われたが、平和な十六世紀に比すれば低い。かくて重大な食糧缺乏の度に死亡率が増大するので、最下層は不作年に飢餓線に非常に接近するといふ結論を得る。従つて死亡率は原則的に最貧層の諸條件に依ると考えられる。かかる産業革命以前の社會の特徴は、多くの點で明らかにされる。例えば幼児死亡率や疫病に就て見ても、食料供給が死亡率變動に對する決定的要因たる事を示している。通常産業革命の結果たる新體制を不穩と不安定なものを見るが、寧ろ革命以前の社會の生活が不安定且不规则で自然の氣紛れの無力な犠牲となつた。産業革命以前の社會に於ては出生率死亡率共にそれ以後に比して極めて高く、年齢別分布も非常に異つて居る。舊體制の人口學的特徴は平均壽命の短かい事であり、また生産年齢の小なる事は生産水準の低さを助長した。

斯の如き瑞典の狀態が當時の一般的狀態を示すが、若しくは北歐に特徴的なものかといふ點に就ては、餘り明白でない。併しスカンディナヴィア諸國の死亡率は多くの大陸諸國より低く、スカンディナヴィア諸國の間では、丁抹、諾威、瑞典の順で死亡率が減少し、芬蘭はその大なる出生率に比し最低の死亡率を示している。これは各國の都市化の性格の相違に基く。大陸に於てはスカンディナヴィアより都市が非常に發達して居り、又スカンディナヴィア諸國に於ても都市人口の割合は丁抹、瑞典、諾威、芬蘭に低くなり、死亡率の水準に對應する。かかる相違は都市の不健康さに基くもので、各國の農村に於ける死亡率に大なる相違はない。都市の不健康さは大部分のみに限らず、最小の都邑と雖も同様であつて、一八一六—一八四〇年に於て四四八の人口を持つに過ぎぬ都邑の死亡率がストックホルムと同じであつた。かくて最小の都邑でさえ、産業革命以前の持ち得ぬ問題を示している。

農業社會とは異つた型に屬する要素は、其後の發展を支配すべきものであるが、産業革命以前には其が無視し得べき程の規模で現われた場合に於てさえ、統御出來ぬ事を示している。産業革命によつて新しい弊害が造出されたのでなく、反對に諸國に於て永い間進行していた弊害が、近代社會の様相を變化せしむべき新勢力の影響の下に前例のない大いさに迄成長したのである。以上の如き論述には新しいものは何もない。それはクラッパムやアシトンの主張と一致するものである。(新保 博)

編集後記

一九五一年も惚忙の中にすぎ、われわれは二十世紀後半の二年目を迎えた。すべての人々が重大な關心をよせていた對日講和條約は、アジア諸國の不安にもかかわらず、大衆の全面講和への熱望を一片の空想としてほおわり、強引に締結された。しかも、原爆の子らの悲痛な訴えといきどおりをよそに、自衛のための再軍備はまことしやかにとなえられ、またジャーナリズムはこれに乗じて世論を統一の方向にみちびこうとして必死である。

殊にわれわれ若い學徒を失望させた事實は去る十月十九日、第十一回日本學術會議において、務臺教授らの「講和條約調印に際しての聲明」が、九三對五六をもつて否決されたことである。「人類平和のために戦争を目的とする科學の研究に絕對に從わぬ」と聲明することが、果して科學者の良心にもとる行動なのであるか。その理由が單に「政治的であるから」というならば、平和への叫びが思想も宗教もそして民族をもこえて全人民の聲となつて居る今日、それは現實からの逃避であり、卑屈な沈黙といわなければならぬ。思えば社會科學者が今日ほど慎重にしかも良心的に生きることを要求されている時代はあるまい。だがそのためには彼は眞實への強い愛情と心の純粹さと、そして何よりもたえまない勇氣とを必要とする。新しい年を迎えるにつけ、前途の困難を想ひこのように感ずるのはひとり筆者のみではあるまい。

(飯川 鼎)

昭和二十六年十二月二十五日印刷 第四十五卷
昭和二十七年一月一日發行 第一號

禁 轉 載

編輯者 東京都港區芝三田慶大經濟學部内 高 村 象 平
印刷者 東京都港區芝三田豐岡町八 川 口 芳 太 郎
印刷所 東京都港區芝三田豐岡町八 圖書印刷株式會社

豫約購讀料一年分 金八四〇圓(送料共)
半ヶ年分 金四二〇圓()
豫約購讀料は發行所宛お拂込み下さい。
誌代變更の場合は精算決濟致します。
編集に關する用件、營業に關する用件、販賣申込も發行所へ願います。

發行所 東京都港區芝三田二丁目 慶應義塾經濟學會
日本出版協會員B二二〇一六